

日本人青年におけるスピリチュアリティ評定尺度の開発

濁川 孝志 立教大学コミュニティ福祉学部*
満石 寿 福岡大学スポーツ科学部
遠藤伸太郎 中央大学理工学部
廣野 正子 郡山女子大学 家政学部
和 秀俊 田園調布学園大学人間福祉学部

Development of a spirituality rating scale for Japanese Youth

NIGORIKAWA Takashi · MITSUISHI Hisashi · ENDO Shintaro · HIRONO Masako ·
KANOU Hidetoshi

はじめに

1. 現代青年と心の問題

現在の日本は、医療や公衆衛生の進歩によって伝染病や乳児死亡率が大幅に減少した結果、世界一の長寿国となった（厚生統計協会、2003）。しかし一方で世相に目を向けると、青少年犯罪の凶悪化、ニート、引きこもり、3万人近い自殺者など“心の病”が関連すると考えられるような社会問題が多発している（前田、2000；発達過程研究会、2002；厚生統計協会、2003）。葉梨（1999）は、これらの状況を生み出す背景には、人間の“心の問題”があることを指摘している。つまり、核家族化の進行、ならびに地域や職場における人間同士のコミュニケーション能力の低下から不安や孤独感を招きやすい生活環境が形成されていること、さらに長引く不況を背景として将来に対する漠然とした不安が広がっていることなどが、人々の気持ちにネガティブな影響をもたらしているという

指摘である。

特に青年層において、これらの影響は顕著に見れているように見える。内閣府の12年版の自殺対策白書によると、15～39歳の各年代（5歳ごと）の死因の1位はいずれも自殺であり、比較可能な15～34歳で見ると、先進7カ国で日本にしか見られない傾向である。さらに20代の死亡者全体の半数は自殺であることを考えると、その深刻さは際立っている（毎日新聞、2013）。また2012年の厚生労働省の調査によれば、青年層のニートの数はここ数年60万人台で推移し、ひきこもりの世帯数は32万世帯に上るといふ（厚生労働省、2013）。これらの者たちは、時としてインターネットという仮想現実の中に自分の存在を探し求めているようにも見える。携帯電話を使った「お悩み解決館」という有料サイトには、青年層を中心に約4万人が登録をしており、1日の利用者数は1万7000人に上るといふ現実がある。磯村も指摘するように、そこには、「私とは？」というその意味を求めて漂流する彼らの姿が見えるのである（磯村、2007）。このような状況を生み出す要因としては、昨今の就職難や、先行きが見えない経済状況への漠然たる不安などが考えられるが、いずれにせよ、漠然たる不安の中で自身

* 立教大学：〒352-8558埼玉県新座市北野1-2-26立教大学コミュニティ福祉学部

の心の安定を保つことが困難な現代の青年像を象徴するような事実である。そして、このような現象がもたらされる根本的な背景には、PIL (Purpose in Life) 研究会が指摘するように、これまで我々が歩んできた衣食住・蓄財に関わる欲望の充足、すなわち物質的な価値観ばかりが注目されてきたことが挙げられよう。すなわち、生活水準は向上し物質的欲求は満たされつつある一方で、人々が生きる意味や目的を見失ったという事実である (PIL 研究会, 1993)。また、生きがい感は一般に人が積極的に生きる上での重要な要素と考えられるが (小林, 1989; 熊野・木下, 2003; 大石・安川・濁川・飯田, 2007)、神田 (2012) は、内外の「生きがい」に関する論文を広くレビューし、生きがいの概念や、青年期における生きがい研究の動向などを整理している。その中で、中高生を対象とした堀内・竹内・坂柳 (1983) の研究に言及し、「何に生きがいを求めてよいか解らない」と答えた割合が 40% 程度に上ること等を紹介しているが、この結果もまた、生きがいを見い出すことができない現代青年のあり様を示唆するものかも知れない。

2. スピリチュアリティと QOL

窪寺 (2004) は、このような人間が経験する生きる意味や目的意識の喪失からくる苦痛をスピリチュアル・ペインとし、この状態からの解放、すなわちスピリチュアルケアの重要性を指摘している。また大石・安川・濁川 (2008) も、こうした心の問題の多くはスピリチュアリティの喪失と関連があることを指摘し、現代にはスピリチュアルな価値観の醸成が求められているとしている。さらに濁川 (2009) は、現代人の QOL を考えるうえで重要な地球環境問題の改善に関しても、スピリチュアルな価値観の涵養が必要であることを指摘している。では、スピリチュアリティとは何か。スピリチュアリティ

と生活の質、すなわち QOL とは、どのような関係にあるのだろうか。

スピリチュアリティという用語が我が国で頻繁に用いられるようになったのは、1998 年の世界保健機構 (WHO) 執行理事会において spiritual well-being という概念が取り上げられて以降とされる (竹田・太湯, 2006)。高橋・井出 (2004) によれば、スピリチュアリティの本質は、人生の意味や死の恐怖、神の存在の探求など、人間存在の根底に関わる人間自身の内面性であり、すべての人間が共通にもつ生命の根源であるとされる。さらに、人生の危機に直面した時に意識化するという性質を持つといわれる。また山崎 (2005) は、スピリチュアリティを人間存在を構成している重要な要素であるが、普段は潜在化しているものであるとし、その上で、人間存在の構成要素である身体的、社会的、精神・心理的なものが、なんらかの理由によって危機に瀕し、痛みとして顕在化した時、それまで潜在化していたスピリチュアリティが刺激を受け、スピリチュアル・ペインとして顕在化するとした。そして、人生の危機に直面したときに機能するスピリチュアリティは、生きるうえでのバックボーンともいえるものであると位置づけている。

また QOL についても、WHO の 1998 年の執行理事会において、スピリチュアリティは人間の尊厳の確保や QOL を考えるのに必要な本質的なものであるという意見が出されている (藤井・李・田崎・松田・中根, 2005)。そして真鍋・古屋・三谷 (2010) は、近年、ヘルスケアや福祉サービスの領域においてスピリチュアリティの問題に多くの関心が寄せられているが、その背景には、これまでの研究からスピリチュアリティが個人の安寧や QOL のあり方に大きな影響を及ぼしていることが明らかにされてきたとしている。さらに、WHOQOL-100 に代表されるような多元的測定手法による QOL 研究では、

スピリチュアリティの次元は不可欠な構成要素の一つとなっていることを示唆している。

3. 日本人青年層におけるスピリチュアリティ測定尺度の必要性

上述のようにスピリチュアリティが人間のQOLにとって重要な要素であるとするれば、個々人のもつスピリチュアリティの状態を把握することは、個人のQOLやwell-beingを考えるうえでとても大切な意味を持つ。

これまでに我が国で開発された代表的なスピリチュアリティ測定尺度としては、SRS尺度（Spirituality Rating Scale）（比嘉, 2002）、FACIT-Sp（Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual）（野口他, 2004）、改訂版自己超越傾向尺度（Self-Transcendence Scale: 以下STSとする）（中村, 1998）などが挙げられる。SRS尺度を開発した比嘉は、スピリチュアリティの構成概念を、「何かを求めそれに関係しようとする積極的な心の持ち様と、自分自身やある事柄に対する感じ、または思い」としたが、これは看護学の教科書からスピリチュアリティに関連するキーワードとして、「意味と目的、自己実現への努力」、「崇高な力とのつながり」、「死すべき者としての覚悟」、「共同体感覚と強い連帯感」、「感謝と尊敬」、「創造性」、「希望と力の源へのニード」、「調和のとれた関係」、「信念と価値観の表明」を抽出し分析したものであった。

Peterman et al. (2002) は、癌などの慢性疾患患者のスピリチュアリティを測定するためにFACIT-Spを開発した。その日本語版は下妻らによって開発されたものであり、「生きる意味／平穏」と「信念」の2因子から構成される尺度である（野口他, 2004）。

STSを開発した中村は、スピリチュアリティの概念化の結果、その構成要素として「生の意味と目的」「霊性の自覚」「命の永続性」「自然

との一体感」「無償の愛」「個人性」「自我固執」の7つの因子が存在することを明らかにしている。そして、若年層にとってのスピリチュアリティは、生きること、いのちの側面が重要な課題であるのに対し、60歳以上では、それらに加えて、人間を越えたもの、超越的な意識の次元に関心が向かうようになることを明らかにしている。

また、竹田・太湯（2006）は、日本におけるスピリチュアリティ概念をめぐる現状と課題について概観している。その中で高齢者のスピリチュアリティに関し、その概念を整理することの必要性があるとし、文献を分析対象として高齢者のスピリチュアリティ概念の抽出と構造化を試みている。その結果、日本人高齢者のスピリチュアリティは①生きる意味・目的、②死と死にゆくことへの態度、③自己超越、④他者との調和、⑤よりどころ、⑥自然との融和の6つの概念から構成されていることを示している。さらに竹田他（2007）は、ここで抽出された概念を基に、高齢者のスピリチュアリティ健康尺度を開発している。

一方田崎・松田・中根（2001）は、WHOQOL / SRPB（Spirituality Religiousness and Personal Beliefs）プロジェクト（WHOの健康概念に関する改訂の動きに応じた国際比較調査）の一環として、日本におけるスピリチュアリティ観を質的に検討している。その結果、日本人のスピリチュアリティ観には個人差が大きい、共通項として①自然との対比における人の小ささ、②自然への畏敬の念、③祖先との関わり、④個人の内的強さ、⑤特定の宗教をもたないにしても何か絶対的な力の存在を感じる、など5項目を明らかにしている。

また、スピリチュアリティに関わる研究の中で、生きがい感との関連からPILテスト（The Purpose In Life Test: 以下PILとする）が使用されることもある（大石他, 2007）。Frankl（1952,

1969) は人生の意味・目的を重視する実存的心理療法であるロゴセラピーを開発したが、人生の意味・目的の喪失した状態を「実存的空虚 (existential vacuum)」とよんだ。そして、このロゴセラピーに基づいて Crumbaugh and Maholick (1964, 1969) が、「実存的空虚」の程度を測定するために開発したのが PIL テストである。青木(2004)が指摘するように、スピリチュアルケアが、「生きる目的や意味を見出せないで苦悩している」すべての人に必要とされるものであるとするならば、実存的虚無感は、スピリチュアリティと関連した重要なファクターである。従ってこのテストは、本来、実存的虚無感や、その反意としての「生きがい感」をみるものであるが、スピリチュアリティに関連する要素を反映するテストと位置づけられるだろう。

以上概観してきたように、スピリチュアリティを測定する尺度や、その概念構成を抽出する試みは既に多くの研究者によって行われている。しかしそのほとんどは、看護や介護場面、あるいは末期患者、高齢者などを対象にしたものであった。一方先にも述べたが、日本の青年層は、自殺、ニート、引きこもりといった社会現象として顕在化する多くの心の問題を抱えている。アイデンティティの確立は、青年期の最重要課題である。しかし坂本 (2006) も指摘するように、価値観が多様化した現代社会は、青年層にとってアイデンティティの確立が非常に難しい時代になっている。このような時代背景の中、窪寺 (2004) のいう、生きる意味や目的意識の喪失からくるスピリチュアル・ペインを、多くの青年が抱えているのではないだろうか。従って、青年層のスピリチュアルケアという問題は、現代日本社会が持つ重要な課題の一つであると思われる。そして同時に、青年層のスピリチュアリティ概念の分析や、スピリチュアリティ傾向を測る尺度作りの検討は、スピリチュ

アルケアを実施するうえで、その前提としてなされるべき重要な課題であろう。

研究目的

スピリチュアルケアは、青木 (2004) も指摘しているように終末医療、ホスピスに限定されず、「生きる目的や意味を見出せないで苦悩している」すべての人に必要とされるものである。そして竹田・太湯 (2006) も指摘するように、日本人のスピリチュアリティ概念は、年齢によって異なる様相をもつが、それぞれの世代の特徴を明らかにした研究は少ない。従って、日本人を世代ごとに分けて、そのスピリチュアリティ概念構造を分析することや、各世代に対応したスピリチュアリティ評定の尺度作りは重要な課題である。このような現状の中にあって本研究は、日本の青年期に焦点を当て、そのスピリチュアリティ傾向を評定する尺度作りを試みたものである。

研究方法

1. 調査対象者

1) 因子分析並びに尺度の信頼性、構成概念妥当性の検討に関する調査

調査対象者は、首都圏の3大学の大学生 310名であった。明らかに不適切であると思われる回答を削除した結果、有効回答は 271名であり、その内訳は男性 98名 (平均年齢 20.05 ± 2.97歳)、女性 173名 (平均年齢 20.03 ± 2.17歳)であった。

2) 基準関連妥当性に関する調査

基準関連妥当性の分析は、①改訂版自己超越傾向尺度 (STS) (中村, 1998) との関連性、②死生観および PIL との関連性の2つの調査によ

り検討した。

① STS との関連性検討

調査対象者は、日本全国の5大学から選ばれた大学生508名であった。明らかに不適切であると思われる回答を削除した結果、有効回答は500名であり、その内訳は男性323名（平均年齢 20.04 ± 1.15 歳）、女性177名（平均年齢 19.90 ± 2.11 ）であった。

② PIL、死生観尺度との関連性検討

調査対象者は、日本全国の5大学から選ばれた大学生541名であった。明らかに不適切であると思われる回答を削除した結果、有効回答は533名であり、その内訳は男性219名（平均年齢 19.56 ± 1.74 歳）、女性333名（平均年齢 20.37 ± 1.23 ）であった。

2. 指標

1) スピリチュアリティ測定に関する尺度原項目の構成

スピリチュアリティの定義や概念構造に言及する既存の多くの文献を参照し（窪寺, 2004; 竹田・太湯, 2006; 比嘉, 2002; 田崎他, 2001; 葛西, 2003; 中村・長瀬, 2004）、その構成概念について検討した。その結果、多くの定義や概念分析結果に重複して見られる項目として、『他者とのつながり』、『目に見えない大いなる存在』、『畏敬の念』、『死を超えた希望』、『拠り所のある安心感』、『物質主義からの解放』、『自己評価』の7項目を見出した（和・廣野・満石・遠藤・濁川, 2014）。よって、これらの7項目を本研究におけるスピリチュアリティ構成の暫定的カテゴリーとした。これらのカテゴリーを基本的質問内容に据え、20歳代、30歳代、40歳代、50歳代の各世代の男女各1名ずつを対象に、スピリチュアリティに関するインタビュー調査を実施し、スピリチュアリティ概念に関する質的分析を行った（和, 2014）。なおこの段階では、偏りのない日本人のもつスピ

リチュアリティ概念の全体像を把握するため、敢えて若者だけではなく各世代のインタビューを行った。

そこで得られた和らの質的研究の検討結果を基に、KJ法を用いスピリチュアリティの概念構成、サブカテゴリー、カテゴリーを再構築したものが表1である。この表を基に議論を重ね、特に青年層である20歳代の男女2名の対象者のインタビュー内容を慎重に考慮し、そこで語られた意図を斟酌しながら内的妥当性を検討した結果、最終的に71項目のスピリチュアリティを問う質問が決定された。各項目に対する回答は、「まったく当てはまらない：1点」から「とてもよく当てはまる：7点」までの7件法であった。

2) 改訂版自己超越傾向尺度 (STS : Self-Transcendence Scale)

信頼性、妥当性が認められている既存のスピリチュアリティ尺度を基準に、本研究で得られた尺度の妥当性を検討するため、中村（1998）の開発したスピリチュアリティ尺度であるSTSを使用した。

3) 死生観尺度

スピリチュアリティの一要素と考えられる死生観と本研究で開発した尺度の関連性をみるために、大石他（2007）が開発した死生観尺度を用いた。これは飯田（2003）の「生きがい論」をベースに作成されたもので、例えば、「魂の永続性」「生まれ変わり」など死生観にかかわる5つの項目に関し、それをどの程度強く信じているかを問うもので、「絶対に信じない」から「全面的に信じる」まで、7件法で回答するものである。

4) PIL尺度 (The Purpose In Life Test)

スピリチュアリティと関連する要素としての生きがい感と、本研究で開発した尺度の関

表1. スピリチュアリティ概念のカテゴリー化

カテゴリー	サブカテゴリー	概念
他者とのつながり	個を超えたつながり	周囲とのつながり、個を超えた繋がり、共生、個を超えた存在、共時性
	先祖との融和	先祖との融和
自然との一体感	自然との一体感	自然に対する感受性、自然との一体感、自然との融和、自然の癒し、自然による自分の認識、畏怖する存在、神秘的な存在
畏敬の念	目に見えない大いなる存在	目に見えない世界への意識、目に見えない存在、大いなる存在、目に見えない力、謙虚な気持ち、霊、魂、縁、運
	畏敬の念	感謝の気持ち、畏敬の念、感謝と愛生かされている感覚、謙虚、清々しい気持ち
	宗教的なもの	納得、信念、抱擁力、信じること
死を超えた希望	死を超えた希望	目標、生の実感、生きる意義、生きる意味や目的、命の永続性、生まれ変わり
	死の受容	死の受容、現状の受け入れ、運命の受容、帰無
拠り所のある安心感	幸福な人生	よりよく生きること、幸福な人生、いきがい、幸福感、満足感、充足、喜びの共有
	安心	安心、安寧、拠りどころ、家族や友人の存在、絶対的受動性
物質主義からの解放	物質主義からの解放	物質主義からの開放、無心、足るを知ることで、精神性の重視
自律	依存しない生き方	自分自身に対する客観的視点と理解、依存からの解放、プライド、他者評価からの解放

連性をみるために PIL テスト日本語版（佐藤、1975）を使用した。本研究では、先行研究に倣い PIL テストの内7段階評定尺度で構成された20の質問項目からなる Part-A のみを実施し、熊野（2003, 2005）の研究を基にして「PIL テストで測定される実存的空虚感が低ければ生きがい感が高く、逆に実存的空虚感が高ければ生きがい感が低い状態」と定義した。

3. 調査方法

質問紙調査は、集団一斉法にて実施した。また以下の分析には、『統計解析ソフト SPSS ver.20』を使用した。

1) 因子構造の検出と内的整合性の確認

尺度の因子構造を検出するため、調査結果を基に天井効果（平均＋標準偏差＞7.0）および床効果（平均－標準偏差＜1.0）となる質問項目は分析対象から外し、探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。また、信頼性の検討、すなわち得られた因子の内的整合性

を確認するため、各因子における Cronbach の α 係数を算出した。

2) 構成概念妥当性の検討

構成概念妥当性を確認するために、ここで得られた因子のこのモデル適合性を、 χ^2 (df)、Comparative Fit Index (CFI)、Goodness of Fit Index (GFI)、Adjusted Goodness-of-Fit Index (AGFI)、Root Mean Squares Error of Approximation (RMSEA) に基づき判定した。

3) 基準関連妥当性の検討

① STS との関連性

本研究で得られた尺度の妥当性を検討するため、中村（1998）の開発したスピリチュアリティ尺度である STS と本研究で得られた尺度の得点間に相関を求めた。

② 死生観尺度との関連性

スピリチュアリティの一要素と考えられる死生観と本研究で開発した尺度の関連性をみるために、死生観尺度（大石他、2007）の回答から

被験者を死生観高位群（スピリチュアルな傾向の強いグループ）、死生観低位群（スピリチュアルな傾向の弱いグループ）の2群に分け、t検定を用い、本研究で得られた尺度の値に差があるかどうかを検討した。なお、7件法の死生観尺度において、信じる傾向の強い上位2件の回答を「死生観高位群」、信じる傾向の弱い下位2件の回答を「死生観低位群」とした。

③ PIL 尺度との関連性

スピリチュアリティと関連する要素としての生きがい感と、本研究で開発した尺度の関連性をみるために、PILテスト（佐藤, 1975）と本研究で得られた尺度の得点間に相関を求めた。

4. 倫理的配慮

本研究の調査は、大学生を対象に行われた。調査の実施に当たり、まず調査目的を説明し、あくまで自発的な参加による調査であり、協力の有無によって成績などの不利益は一切生じないこと、回答者が特定されないこと、研究以外には回答を利用せず、分析が終了次第資料は破棄することを説明した。その上で、調査協力の同意を得られた学生のみに対し調査を実施した。

結果

1. 因子の抽出とJYS作成および因子の命名

スピリチュアリティ尺度作成のための質問とした71項目について、固有値1.0以上、因子負荷量0.4以上を基準として探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。その結果、5因子構造28項目が抽出された。ここで得られた28項目の各得点と当該項目を除いた全体の合計得点との間に相関を求めたところ、1項目が統計的有意水準に満たない相関係数を示した。この項目は、尺度全体で測定しようとしている事象と関係が非常に弱いと判断し除外

した。従って、最終的に27項目が尺度の構成要素として選定された。この27項目における回転後の累積寄与率は53.03%であった（表2）。ここで得られた5因子について、以下のように命名した。

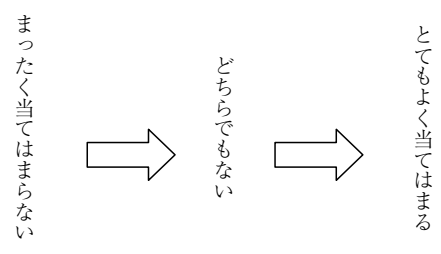
第1因子（7項目）は、「自然の中にいると、気力がわいてくる。」「森や湖など、自然の中にいると心が落ち着く。」「自然の中にいると疲れた心が癒される。」といった項目で構成されていることから、「自然との調和」因子と命名した。第2因子（7項目）は「精神的な満足感を日々感じている。」「私は生きがいをもっている。」「これまでの自分の人生に満足している。」といった項目で構成されていることから、「生きがい」因子と命名した。第3因子（7項目）は、「日常の出来事に対して、目に見えない世界や力を意識させられることがある。」「目に見えない存在を信じている。」「人間を超えた大いなるものの影響を受けていると感じる。」といった項目で構成されていることから、「見えない存在への畏怖」因子と命名した。第4因子（4項目）は、「普段から先祖の遺伝子を引き継いでいることを意識している。」「先祖は自分にとってとても大切な存在である。」「自分のルーツを意識することがある。」といった項目で構成されていることから、「先祖・ルーツとの繋がり」因子と命名した。第5因子（2項目）は、共に逆転項目で「他人の意見に、つい流されてしまう。」「何か問題が起きた時、つい人に頼ってしまう。」といった項目で構成されていることから、「自律」因子と命名した。

この5因子構造27項目の質問項目を、日本人青年用スピリチュアリティ評定尺度（JYS: Japanese Youth Spirituality Rating Scale 以下JYSとする）とした（表3）。質問項目に対する回答は、「まったく当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」までの7件法で、得点化の際には、順に1点から7点を与えた。また、項目番号3

表2. 因子分析の結果

因子名・項目 【全体： α 係数=.886】	因子負荷量					共通性
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
第1因子 『自然との調和』 【α係数=.904】						
16 自然の中にいると、気力がわいてくる。	.895	-.035	-.065	.075	.051	0.755
12 森や湖など、自然の中になると心が落ち着く。	.859	.003	-.010	-.117	-.027	0.688
22 自然の中にいると、力（パワー）をもらえる感じがする。	.845	-.015	.059	-.041	-.087	0.715
5 自然の中にいると疲れた心が癒される。	.800	-.022	-.008	-.086	.074	0.628
20 自然の中にいると、自分と向き合う事ができる。	.762	.013	-.038	.085	.034	0.616
13 自然は自分にとって、とても大切な存在である。	.592	.084	.076	.006	-.004	0.473
8 自然は、全てを受け入れてくれる存在である。	.481	.073	.051	.149	-.019	0.446
第2因子 『生きがい』 【α係数=.863】						
21 精神的な満足感を日々感じている。	.038	.785	.033	-.011	-.157	0.552
2 幸福な人生を過ごしている。	-.055	.737	-.001	-.157	-.109	0.465
27 私は生きがいをもっている。	-.021	.712	-.028	.060	-.027	0.537
11 これまでの自分の人生に満足している。	-.009	.706	-.029	-.014	.047	0.529
6 これまでの自分の人生は、生きがいに満ちていた。	.128	.666	-.062	.103	.081	0.567
15 自信をもって生きていと思う。	-.032	.663	-.004	-.090	.169	0.456
1 生きる意味や目的をもって生きていっている。	.039	.540	.018	.098	.108	0.447
第3因子 『見えない存在への畏怖』 【α係数=.856】						
4 目に見えない存在を信じている。	-.009	-.090	.818	-.066	-.045	0.534
7 日常の出来事に対して、目に見えない世界や力を意識させられることがある。	-.003	.041	.772	.018	.034	0.587
10 目に見えない存在との繋がりを感ずる。	-.138	.084	.724	.120	.045	0.543
17 人智の及ばない世界があると思う。	-.065	-.013	.692	-.054	.130	0.486
26 人間を超えた大いなるものの影響を受けていると感じる。	.039	.124	.658	.093	-.061	0.566
25 自然には、人間を超えた神秘的なものが宿ると思う。	.235	-.092	.504	-.020	-.056	0.425
19 自然は、畏怖する存在である。	.166	-.122	.479	-.042	-.022	0.349
第4因子 『先祖・ルーツとのつながり』 【α係数=.776】						
9 普段から先祖の遺伝子を引き継いでいることを意識している。	-.010	-.126	-.044	.849	.109	0.521
18 先祖代々、何か引き継がれていると感じる。	-.014	-.024	.011	.748	-.050	0.508
24 先祖は自分にとってとても大切な存在である。	.017	.062	.005	.585	-.110	0.447
14 自分のルーツを意識することがある。	-.013	.050	.048	.542	-.035	0.354
第5因子 『自律』 【α係数=.772】						
3 他人の意見に、つい流されてしまう。	.062	-.030	.055	-.030	.831	0.402
23 何か問題が起きた時、つい人に頼ってしまう。	-.037	.071	.001	-.018	.668	0.426
固有値	6.783	2.774	2.493	1.264	1.003	
寄与率	25.121	10.273	9.235	4.683	3.716	
累積寄与率	25.121	35.394	44.629	49.312	53.028	
因子間相関 (第1因子)	1.000					
(第2因子)	.295	1.000				
(第3因子)	.437	.242	1.000			
(第4因子)	.335	.273	.542	1.000		
(第5因子)	.045	.237	.006	-.054	1.000	
確認的因子分析						
CMIN	627.611	314.000		有意	p<.000	
CFI	.907					
AGFI	.828					
GFI	.857					
RMSEA	.061					

表3. Japanese Youth Spirituality Rating Scale (JYS) 質問項目

							
1. 生きる意味や目的をもって生きている。	1	2	3	4	5	6	7
2. 幸福な人生を過ごしている。	1	2	3	4	5	6	7
3. 他人の意見に、つい流されてしまう。*	1	2	3	4	5	6	7
4. 目に見えない存在を信じている。	1	2	3	4	5	6	7
5. 自然の中にいると疲れた心が癒される。	1	2	3	4	5	6	7
6. これまでの自分の人生は、生きがいに満ちていた。	1	2	3	4	5	6	7
7. 日常の出来事に対して、目に見えない世界や力を意識されることがある。	1	2	3	4	5	6	7
8. 自然は、全てを受け入れてくれる存在である。	1	2	3	4	5	6	7
9. 普段から先祖の遺伝子を引き継いでいることを意識している。	1	2	3	4	5	6	7
10. 目に見えない存在との繋がりをを感じる。	1	2	3	4	5	6	7
11. これまでの自分の人生に満足している。	1	2	3	4	5	6	7
12. 森や湖など、自然の中にいると心が落ち着く。	1	2	3	4	5	6	7
13. 森の大木などに接すると、畏怖の念を感じる。	1	2	3	4	5	6	7
14. 自分のルーツを意識することがある。	1	2	3	4	5	6	7
15. 自信をもって生きていると思う。	1	2	3	4	5	6	7
16. 自然の中にいると、気力がわいてくる。	1	2	3	4	5	6	7
17. 生きていることが素晴らしいことだと思う。	1	2	3	4	5	6	7
18. 先祖代々、何か引き継がれていると感じる。	1	2	3	4	5	6	7
19. 自然は、畏怖する存在である。	1	2	3	4	5	6	7
20. 自然の中にいると、自分と向き合う事ができる。	1	2	3	4	5	6	7
21. 精神的な満足感を日々感じている。	1	2	3	4	5	6	7
22. 自然の中にいると、力（パワー）をもらえる感じがする。	1	2	3	4	5	6	7
23. 何か問題が起きた時、つい人に頼ってしまう。*	1	2	3	4	5	6	7
24. 先祖は自分にとって、とても大切な存在である。	1	2	3	4	5	6	7
25. 自分の現状を素直に受け入れられる。	1	2	3	4	5	6	7
26. 人間を超えた大いなるものの影響を受けていると感じる。	1	2	3	4	5	6	7
27. 生きがいをもっている。	1	2	3	4	5	6	7

(注) *3、23の2項目は逆転項目

および23の2項目に関しては、逆転項目のため、順に7点から1点を与えた。

分布の正規性検定 (Shapiro-Wilk) の結果、JYS の得点は正規分布していることが確認された (Shapiro-Wilk 統計量 =0.98, df=27, $p < .05$)。また第4因子と第5因子間に有意水準に満たない非常に弱い負の相関 ($r = -0.05$) が見られた以外、全ての項目は正の相関を示していることから、27項目の得点を加算することによって、スピリチュアリティの程度を判定できると判断した。従って、この質問紙では得点が高いほどスピリチュアリティが高いことを意味する。

2. JYS得点の男女比較

JYS 全体および各因子の男女別の得点傾向を表4に示す。JYS 全体の合計点では、男性が 124.6 ± 24.1 点、女性が 126.2 ± 21.2 点であり、女性の方がわずかに高い傾向を示した ($p < .05$)。また因子ごとに見ても男女間で若干の差が検出され、第1、第3因子では女性が、第4、第5因子では男性が高い値を示した。第2因子では有意な差が見られなかった。

3. JYSの信頼性、構成概念妥当性検討

1) 信頼性の検討

JYS に関して、信頼性を検討するため、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、第1因子 (自然との調和因子) $\alpha = 0.904$ 、第2因子 (生きがい因子) $\alpha = 0.863$ 、第3因子 (見えない存在への畏怖因子) $\alpha = 0.856$ 、第4因子 (先祖・ルーツとのつながり因子) $\alpha = 0.776$ 、第5因子 (自律因子) $\alpha = 0.772$ がそれぞれ得られた。また尺度全体では $\alpha = 0.886$ であった。このことから、JYS は許容できる内的整合性を有していることが確認された (表2)。

2) 構成概念妥当性の検討

JYS に関して検証的因子分析を行った結果、それぞれの統計値は、 χ^2 (df) =627.61 (314)、CFI=0.907、GFI=0.86、AGFI=0.83、RMSEA=0.061 であった。CFI (0.9以上) と RMSEA (0.08以下) は必要な水準を満たしていたが、GFI、AGFI、の数値は統計的許容水準には僅かに届かない値であった。

表4. JYSにおける男女別得点傾向

	性別	N	合計得点の 平均値	標準偏差	平均得点	標準偏差	t 値	有意確率
全体	男性	323	124.6	24.07	4.29	0.83	0.78	0.44 *
	女性	177	126.2	21.21	4.35	0.73		
第1因子	男性	323	32.1	9.15	4.59	1.31	1.23	0.22 *
	女性	177	33.2	7.84	4.74	1.12		
第2因子	男性	323	32.9	8.30	4.70	1.19	0.18	0.86
	女性	177	32.7	7.31	4.68	1.04		
第3因子	男性	323	27.6	8.34	3.94	1.19	1.52	0.13 *
	女性	177	28.7	7.58	4.10	1.08		
第4因子	男性	323	15.9	5.33	3.99	1.33	0.73	0.46 *
	女性	177	15.6	4.41	3.90	1.10		
第5因子	男性	323	7.0	2.46	3.52	1.23	0.81	0.42 *
	女性	177	6.8	2.37	3.42	1.18		

* $p < .05$

表5. JYSとSTSの相関

	全体	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
相関係数	0.69**	0.61**	0.50**	0.45**	0.53**	0.12**
N	500	500	500	500	500	500

** p<.01

4. JYSの基準関連妥当性の検討

1) STSとの関連性

JYS 得点と既存のスピリチュアリティ評定尺度である STS 得点の間に相関を求めた。その結果、JYS 得点全体と STS の間には $r=0.69$ ($p < .01$) の相関が得られた。また因子ごとの相関は、それぞれ第1因子 $r=0.61$ ($p < .01$)、第2因子 $r=0.50$ ($p < .01$)、第3因子 $r=0.45$ ($p < .01$)、第4因子 $r=0.53$ ($p < .01$)、第5因子 $r=0.12$ ($p < .01$) であった。全体の相関は $r=0.69$ という高い値であり、第5因子以外では各因子とも十分な関連性が確認された（表5）。第5因子に関しては、相関自体は低いものであったが、統計的な有意性は確認された。

2) 死生観との関連性

死生観尺度において、この尺度の上位群は JYS の平均点が 120.80 ± 18.72 、下位群は 101.18 ± 26.29 であった。この差は、統計的に有意なものであった ($p < 0.1$)（表6）。すなわち、死生観尺度においてスピリチュアルな傾向が強かったグループは、弱いグループに比べて JYS 得点が高かった。

3) PILとの関連性

PIL 得点と JYS 得点の間に相関係数を算出した結果、 $r = 0.55$ ($p < 0.001$) が得られた。これは統計的に有意なものであった。すなわち、PIL 得点の高い者は JYS 得点が高いという傾向が観察された。

考察

1. 青年層におけるスピリチュアリティ因子とその解釈

日本の青年層は、自殺やニート、引きこもりなどの社会現象として顕在化する多くの心の問題を抱えているように見える。事実、上田(2006)は学生のもつスピリチュアル・ペインの存在を明らかにし、学生に対するスピリチュアルケアが必要であるとしている。一方、Gorman, Raines, and Sultan (1996) や高橋・井出(2004)は、スピリチュアリティには、高齢者には高齢者特有の、学生には学生特有のといった対象となる世代や母集団ごとに特色があることを指摘している。このような現状に鑑み、本研究は日本の青年層におけるスピリチュアリティ評定尺度の作成を試みた。

本研究において、青年層のスピリチュアリティを構成する因子として、①「自然との調和」、②「生きがい」、③「見えない存在への畏怖」、④「先祖・ルーツとの繋がり」、⑤「自律」の5因子が抽出された。

改訂版自己超越傾向尺度を開発した中村(1998)は、スピリチュアリティを市井の人々の日常生活における体験、信念、態度、および価値観の反映された多様な心理的変数と捉えている。そのうえで、中村・長瀬(2004)は本研究の対象者と年齢が比較的近い看護師と看護学生(平均年齢: 29.48歳)のスピリチュアリティ構成概念を明らかにした。その結果、スピリチュアリティの構成要素として、「生の永続性・

超越性」「無償の愛」「身近な他者との一体感」「実存性」「自然との一体感」の5因子を見出している。これらの内、「自然との一体感」は本研究の「自然との調和」因子と符合するものであった。また、ここでの「実存性」に関しては、「一日一日を一生懸命になって生きているという実感がある」、「自分がこの世に生まれてきたことには、大きな意味があると実感できる」などの項目から見出されていることから、本研究の「生きがい」因子に近い概念であると考えられた。しかし、「見えない存在への畏怖」「先祖・ルーツとの繋がり」「自律」の3因子に関しては、共通性が見出せなかった。これは、中村・長瀬（2004）の調査が看護師と看護学生という限られた対象を扱ったことに起因する、本研究との調査対象の違いが反映された結果と推察される。

SRS (Spirituality Rating Scale) を開発した比嘉（2002）は、WHO の調査（田崎他, 2001）を参考に、スピリチュアリティの構成概念として、「心の平穏」、「内的な強さ」、「他者への愛着」、「人生の意味」、「生きていく上での規範」を挙げ、それを前提に尺度を構成し一定の因子的妥当性や信頼性を見出している。これらの項目と、本研究で得られた5因子を比較すると、「内的な強さ」が「自律」因子と符合する以外、共通性は見出せなかった。比嘉（2002）の研究は、開発における調査対象者が女子大学生に限定されていたため、これが結果の違いをもたらした一つの要因として考えられる。また SRS に関しては、本研究の「見えない存在への畏怖」因子のような、スピリチュアリティの中核的要素である超越的次元への気づきに関する項目が少ない点が指摘されている（中村・長瀬, 2004）。

高齢者のスピリチュアリティ評定尺度を開発した竹田・太湯（2006）は、高齢者のスピリチュアリティ構成概念として、「生きる意味・目的」、「死と死にゆくことへの態度」、「自己超越」、「他

者との調和」、「よりどころ」、「自然との融和」の6因子を挙げている。これらの内、「自然との融和」は本研究の「自然との調和」因子と、「生きる意味・目的」は本研究の「生きがい」因子と、「自己超越」は本研究の「見えない存在への畏怖」因子と符合した。「先祖・ルーツとの繋がり」「自律」の2因子に関しては、共通性が見出せなかった。尺度開発における対象者の年齢が大幅に異なるので、因子構成が異なるのは当然であるが、青年層のスピリチュアリティ構成因子に「先祖・ルーツとの繋がり」が見出せるのは、注目すべき点である。

田崎他（2001）は、WHOQOL / SRPB (Spirituality Religiousness and Personal Beliefs) プロジェクト（WHO の健康概念に関する改訂の動きに応じた国際比較調査）の一環として、日本におけるスピリチュアリティ観を質的に検討している。その結果、日本人のスピリチュアリティ観は大きな個人差が存在するが、共通要素として、「自然との対比における人の小ささ」、「自然への畏敬の念」、「祖先との関わり」、「個人の内的強さ」、「特定の宗教を持たないにしても何か絶対的な力の存在を感じる」との5項が挙げられるとしている。この内、「自然への畏敬の念」は本研究の「自然との調和」因子と、「祖先との関わり」は本研究の「先祖・ルーツとの繋がり」因子と、「個人の内的強さ」は本研究の「自律」因子と、「特定の宗教を持たないにしても何か絶対的な力の存在を感じる」とは本研究の「見えない存在への畏怖」因子と符合した。田崎らの検討結果は、本研究が青年層に見出したスピリチュアリティ構成因子と全般によく符合するものであった。

以上、日本において信頼性・妥当性が認められるいくつかの尺度開発研究、さらに田崎他（2001）の日本人全体を対象とした質的研究のスピリチュアリティ因子構成と、本研究で得られた各因子を比較してみた。前提となるスピリ

チュアリティの解釈自体に幅があり、また調査対象者が異なるため、抽出される因子が異なるのは当然である。その中で、青年層を対象とした本研究と、田崎他（2001）の日本人全体を対象とした質的研究の検討結果に大きな共通性が見出せたのは興味深い点である。ここで「生きがい」因子に関しては共通項を見出せなかったが、上田（2006）は学生のスピリチュアル・ペインが、彼らの生きがい感に影響を与えていることを示している。つまり、生きがい感の無さが、スピリチュアル・ペインに強く関わるとの指摘である。さらに、「生きがい」因子は竹田・太湯（2006）が高齢者に見出し、比嘉（2002）が女子学生を対象の検討にも見出していることから、日本人全般にとって共通するスピリチュアリティ因子と考えて良いのかも知れない。同時に、「自然」に関連する因子は、ここで検討した全ての研究で見出されている。濁川（2009）も指摘しているように、スピリチュアリティは自然との関わりの中で語られてきた経緯があり、また窪寺（2004）は日本人のスピリチュアリティが自然・風習・文化などの影響を強く受けていることを挙げている。このような自然とスピリチュアリティが関連する特徴は、本研究でも確認することができた。さらに「先祖・ルーツとの繋がり」因子が青年層に検出されたことは特徴的なことである。これは現代日本の青年層が持つアイデンティティ・クライシスと関連があるのかも知れない。坂本（2006）も指摘するように、価値観が多様化して、生き方の自由度が増したことで、逆に現代青年は、自分の生きるべき方向性や指針を見出しづらくなった可能性がある。そのような時代を背景として、青年達は、自分とは何かを問うプロセスで“先祖やルーツとの繋がり”の中に自分を見出そうとしているのかも知れない。そして、生きてゆく指針を探す過程で、“生きがい”を求めているのかも知れない。ところで、ここでの「先祖や

ルーツとの繋がり」が意味するものは、得られた関連項目をみる限り、「祖先崇拜」、「祖霊崇拜」といったシャーマニズム的心性、あるいは中国仏教を通じて日本の神祇信仰と習合して形成された「先祖供養」などの宗教性とは異なるものと考えられる。むしろ、先祖の存在があるからこそ現在の自分が在り、現在の自分が生かされているという感覚、すなわちDNAを媒介とした先祖との遺伝的繋がり自覚のようなものであろう。

以上、議論してきたように、本研究で得られた①「自然との調和」、②「生きがい」、③「見えない存在への畏怖」、④「先祖・ルーツとの繋がり」、⑤「自律」の5因子は、対象者が異なる既存のスピリチュアリティ評定尺度とは異なる因子構成を示したが、日本人のスピリチュアリティ構成概念として過去の研究で提示された因子構成と大きな齟齬はなく、またその独自性も示したことから、日本人青年層のスピリチュアリティを構成する因子と解釈して良いものと判断した。

2. JYSの評定尺度としての有用性

まずJYS全体の男女の得点傾向を見ると、結果に示すように女性の方が男性より僅かに高い値を示した。STSを開発した中村（1998）も、女性が男性と比較して僅かにスピリチュアリティ得点が高くなる傾向を報告している。一方で、高齢者を対象にスピリチュアリティ評定尺度を開発した竹田他（2007）は、男女のスピリチュアリティ傾向にほとんど差が見られないことを報告している。本研究の結果では、全体傾向として僅かに女性の方が高くなる傾向を示したが、各因子別の傾向を見ると、必ずしも全ての項目で女性が高い得点を示した訳ではなく、JYSにおける男女差はそれほど明確なものではなかった。従って、日本人青年層のスピリチュアリティ傾向に関して、男女差はそれほど大き

なものではないと考えられる。

JYSの信頼性についてみると、結果に示したように、この種の評定尺度として備えるべき信頼性を有していた。信頼性係数はCronbachの α 係数において、第1因子の「自然との調和」: $\alpha = 0.904$ から第5因子の「自律」: $\alpha = 0.772$ の範囲にあった。「自律」因子が若干弱いものの、因子全体としては $\alpha = 0.886$ と十分な値であった。森林などの自然環境がスピリチュアルな価値観の醸成を促す可能性も持つことを濁川・遠藤・満石(2012)は指摘しているが、ここでも“自然”に関する因子が、強い整合性を持ってスピリチュアリティと関連していることが伺える。

構成概念妥当性に関しては、確証的因子分析の結果、 $\chi^2(df) = 627.61(314.00)$ 、CFI=0.907、GFI=0.86、AGFI=0.83、RMSEA=0.06であった。これらのうちGFI、AGFIは、経験的基準であるGFI > 0.90、AGFI > 0.90に僅かに届かなかった。一方、CFIに関しては基準が満たされていた。またRMSEAも0.08以下であり、適合していると解釈された(山本, 2002)。以上のことから、JYSの示した統計値はGFI、AGFIの精度が若干低いものの、この種のスケールの持つ構成概念妥当性として、概ね許容できる範囲のものであると考えた。

さらに基準関連妥当性に関して見ると、まず中村(1998)の開発したSTSとの間に全体で $r = 0.69$ という十分に高い相関が確認された。しかし第5因子に関しては、統計的有意性は認められたものの $r = 0.12$ というかなり低い値しか得られなかった。第5因子の「自律」は、質問が2項目と他の因子に比べて少なく、合計得点も低いいため全体に得点分散が小さくなったこと

がこの結果の一因として考えられる。いくつかの先行研究(村田, 2002; 森田・井上・千原, 2000; 森田・鄭・井上・千原, 2001)では、自律感の喪失がスピリチュアル・ペインを構成する重要な要因として位置づけられており、先に見た比嘉(2002)や田崎他(2001)の検討でも、自律と関連する項目がスピリチュアリティを構成する因子として挙げられている。坂本(2006)も指摘するように、現代のように若者がアイデンティティを確立しづらい社会は、磯村(2007)の言う「私とは?」という意味を求めて漂流する若者たちを多く産み出す結果となり、その若者たちが、望みながらもうまく自律できない場合、それは自律感の喪失からくるスピリチュアル・ペインを招く大きな要因になると考えられる。このような背景を考えれば、「自律」因子は現代青年のスピリチュアリティを構成する重要な要素であろう。一方他の因子においては、ほぼ満足のいく相関が得られた。

次に、死生観尺度とJYSの関連性について考えてみたい。死生観とは、死と生に関する考え方、見方のことであるが、その中身は、死観、生命観、死後観、肉体観、霊魂観など、いくつかのもので複合的に構成されており、なかでも死後の世界に対する観念が重要な部分を占めている(窪寺, 2000)。そして同時に、死生観は、心の健康に関わる概念と関連することが報告されている(大石・遠藤, 2012)。本研究において、死生観尺度での高得点者、すなわち「魂の永続性」や「生まれ変わり」などを信じる傾向の強いグループは、弱いグループよりも高いJYS得点を示した(表6)。死生観はスピリチュアルな価値観の一要素であり、同時に心の健康

表6. 死生観上位群と下位群におけるJYSの差

死生観グループ	N	JYS得点平均値	標準偏差	t値
上位群	283	120.80	18.72	7.49**
下位群	79	101.18	26.29	

** p<.01

とも関連するファクターであるが、この結果は JYS が死生観に関連したスピリチュアルな傾向を測定するうえで有効であることを示唆するものと考えられる。

さらに PIL と JYS との関連性についてみると、生きがい感を反映する PIL と JYS には統計的に有意な相関が観察された ($r = 0.55$, $p < 0.001$)。神田 (2012) も指摘するように、複数の研究者がそれぞれ“生きがい”について言及し、必ずしも明確な定義づけがなされている状況ではない。しかし大石他 (2007) の指摘にあるように、少なくとも生きがいは人間存在の意味や価値に深く関連する概念であり、その意味で、下妻 (2001)、野口・松島 (2004) の言う全人的 QOL と極めて密接な関係にあると考えられる。先に議論したようにスピリチュアリティが QOL の向上を考える上で重要な要素であるとすれば、JYS が生きがい感と関連するということは、JYS の基準関連妥当性を示す一要因であると考えられるだろう。このように、いくつかの検討から、基準関連妥当性においても JYS はこの種のスケールとして許容できるものであったと考えられる。

以上の結果を総合した結果、JYS は構成概念妥当性の部分で若干難点があるものの、その他の統計的基準はほぼ満足のゆくものであり、日本人の青年層のスピリチュアリティ傾向を探る評定尺度として許容できる統計的資質を有していると判断した。

3. 結論ならびに今後の課題

以上議論してきたように、JYS は他の尺度との比較検討の過程から妥当なスピリチュアリティ構成因子を有していることが示された。また同時に、この種の尺度として許容できる統計的資質を備えていると判断された。さらに 27 項目からなる質問への平均的回答時間は 5 ～ 10 分程度であり、テストとしての簡便性も有

している。よって、JYS は日本人青年層のスピリチュアリティを評定するテストとして有用なものと考えられた。一方、スピリチュアリティは、その解釈そのものに大きな多様性があるため、本研究で定義したスピリチュアリティの解釈にどこまで普遍性があるかに関しては、議論の余地がある。またこのような構造化された質問紙では、個人が持つ多様なスピリチュアリティ観への個別の対応には、自ずと限界がある。従って、この種のテストの宿命でもあるが、集団や個人における一定のスピリチュアリティ傾向を計ることはできるが、個々人のもつ特殊な背景を考慮したきめの細かいスピリチュアリティにまで言及することは難しいだろう。

また、今回は日本の青年層に焦点を当てて尺度開発を試みたが、本研究の調査対象者は全て大学生であった。日本人の大学進学率が 50% を超えているとは言え (文部科学省, 2012)、青年層のスピリチュアリティと位置付けるには、厳密には大学生以外の若者世代を対象とした同種の検討が必要かも知れない。しかし 18 歳から 20 代前半までの比較的幅広い年齢層を持つ大学生は、青年層とされる年齢期との重なりが大きく、青年期を代表させる調査対象として良いものと考えた。一方、スピリチュアル・ペインの問題は青年層に限られた話ではない。日本の壮年層も鬱傾向や自殺の多発などに象徴される多くの心の問題を抱えている (川上, 2006)。今後は、壮年層を対象とした同種の検討も研究課題となるだろう。

引用文献

- 青木信雄 (2004). 高齢者を対象とした“たましいのケアのわく組”ホスピスケアと在宅ケア, 12 (1), 29-32.
- Crumbaugh, J.C. and Maholic, L.T. (1964). An experimental study in existentialism: The psychometric approach to Flankl's concept of noögenic neurosis. *Journal of Clinical*

- Psychology*, **20**, 200-207.
- Crumbaugh, J.C. and Maholic, L.T. (1969). *Manual of instructions for the Purpose in Life test. Psychometric Affiliates*.
- Frankl, V.E. (1952). *Ärztliche Seelsorge*. Tranz Deuticke, Wien. フランクル, V. E. 霜山徳爾 (訳) (1961). 『フランクル著作集2 死と愛』みすず書房.
- Frankl, V.E. (1969). *The will of meaning: foundations and applications of logotherapy*. New American Library. フランクル, V. E. 大沢博 (訳) (1979). 『意味への意思』ブレーン出版.
- 藤井美和・李政元・田崎美弥子・松田正巳・中根允文 (2005). 日本人のスピリチュアリティの表すもの—WHOQOLのスピリチュアリティ予備調査から—日本社会精神医学会雑誌, **14** (1), 3-17.
- Gorman, L. M., Sultan, D.F., and Raines, L.M. (1996). *Davis's manual of psychosocial nursing for general patient care*. ゴーマン, L. M. 池田明子 (監訳) (1999). 『心理社会的援助の看護マニュアル』医学書院pp. 358-371.
- 葉梨康弘 (1999). 『少年非行について考える』立花書房.
- 発達過程研究会 (2002). 『「突発性攻撃的行動および衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究—「キレる」子どもの生育歴に関する研究—』国立教育政策研究所.
- 比嘉勇人 (2002). スピリチュアリティ評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討日本看護科学学会誌, **22** (3), 29-38.
- 堀内安男・竹内登規夫・坂柳恒夫 (1983). 中学生・高校生の生きがいに関する調査研究進路指導研究, (4), 16-24.
- 飯田史彦 (2003). 『CD付新版生きがいの創造』PHP研究所.
- 磯村健太郎 (2007). 『スピリチュアルはなぜ流行るのか』PHP研究所.
- 神田信彦 (2012). 生きがい研究に関する一考察—生きがい概念の検討と、わが国の青年の生きがいに関する研究の動向—人間科学研究, **33**, 13-22.
- 和秀俊・廣野正子・満石寿・遠藤伸太郎・濁川孝志 (2014). 日本人の持つスピリチュアリティ概念構造の探索的な分析—心の問題から生じる社会問題の解決に向けて—立教大学コミュニティ福祉学部紀要, **16**, 39-50.
- 葛西賢太 (2003). 「スピリチュアリティ」を使う人々—普及の試みと標準化の試みをめぐって—湯浅泰雄 (監修) 『スピリチュアリティの現在』人文書院 pp.144-145.
- 川上憲人 (2006). 世界のうつ病、日本のうつ病—疫学研究の現在—医学のあゆみ, **219** (13), 925-929.
- 小林司 (1989). 『「生きがい」とは何か—自己実現へのみち—』NHK ブックス.
- 厚生統計協会 (2003). 『国民衛生の動向2003年』厚生省の指標.
- 厚生労働省 (2013). 「厚生省HP」 (<http://www.mhlw.go.jp/index.shtml>).
- 窪寺俊之 (2000). 『スピリチュアルケア入門』三輪書店.
- 窪寺俊之 (2004). 『スピリチュアルケア学序説』三輪書店.
- 熊野道子・木下富雄 (2003). 生きがいとその類似概念の構造日本心理学会第44回大会発表論文集, 268-269.
- 熊野道子 (2003). 人生観における生きがいの2次元モデル健康心理学研究, **16** (2), 68-76.
- 熊野道子 (2005). 生きがいを決めるのは過去の体験か未来の予期か? 健康心理学研究, **18** (1), 12-23.
- 前田雅英 (2000). 『少年犯罪: 統計からみたその実像』東大出版会.
- 毎日新聞 (2013). 2013年03月30日東京朝刊.
- 真鍋顕久・古屋健・三谷嘉明 (2010). スピリチュアリティとQOLの関係に関する理論的検討名古屋女子大学紀要, (56), 41-52.
- 文部科学省 (2012). 「平成24年度学校基本調査(確定値)の公表について」 (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2012/12/21/1329238_1_1.pdf).
- 森田達也・井上聡・千原明 (2000). 終末期がん患者の希死念慮と身体的苦痛・実存的苦痛ターミナルケア, **10** (3), 175-182.
- 森田達也・鄭陽・井上聡・千原明 (2001). 終末期がん患者の霊的・実存的苦痛に対するケア—系統的レビューにもとづく統合化—緩和医療学, **3** (4), 80-92.
- 村田久行 (2002). 臨床に活かすスピリチュアルケアの実際3—スピリチュアルペインの構造とケアの指針—ターミナルケア, **12** (6), 521-525.
- 中村雅彦 (1998). 自己超越と心理的幸福感に関する研究—自己超越尺度作成の試み—愛媛大学教育学部紀要 (教育科学), **45** (1), 59-79.
- 中村雅彦・長瀬雅子 (2004). 看護師と看護学生のスピリチュアリティ構成概念に関する研究日本トランスパーソナル心理学/精神医学会誌, **5** (1), 45-51.
- 濁川孝志 (2009). 環境問題とスピリチュアリティ立教大学コミュニティ福祉学部紀要, **11**, 91-110.
- 濁川孝志・遠藤伸太郎・満石寿 (2012). 自然環境がスピリチュアルな講義の効果に及ぼす影響—自然がもたらすスピリチュアリティの向上の可能性—日本トランスパーソナル心理学/精神医学, **12** (1), 82-95.
- 野口海・松島英介 (2004). がん患者のスピリチュアリ

- テイ (Spirituality) 臨床精神医学, **33**, 567-572.
- 野口海・大野達也・森田智視・相原興彦・辻井博彦・下妻晃二郎・松島英介 (2004). がん患者に対する一Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual (FACIT-Sp) 日本語版の信頼性・妥当性の検討—総合病院精神医学, **16** (1), 42-48.
- 大石和男・安川通雄・濁川孝志・飯田史彦 (2007). 大学生における生きがい感と死生観の関係健康心理学研究, **20** (2), 1-9.
- 大石和男・安川通雄・濁川孝志 (2008). 死生観に関する教育による生きがい感の向上—飯田史彦による「生きがい論」の応用事例—トランスパーソナル心理学／精神医学, **8** (1), 44-50.
- 大石和男・遠藤伸太郎 (2012). 大学生の首尾一貫感覚 (SOC) と死生観の関連性についてトランスパーソナル心理学／精神医学, **11** (2), 69-79.
- Peterman, A.H., Fitchett, G., Brady, M.J., Hernandez, L., Pharm. D., and Cella, D. (2002). Measuring spiritual well-being in people with cancer: The functional assessment of chronic illness therapy—Spiritual Well-Being Scale (FACIT-Sp). *Annals of Behavioral Medicine*, **24**(1), 49-58.
- PIL研究会 (1993). 『生きがい—PILテストつき—』システムパブリカ.
- 坂本公男 (2006). 青年期の心の発達と自立の課題高知県教育公務員長期研修生研究報告平成18年度大学・大学院等留学生, 1-7.
- 佐藤文子 (1975). 実存心理検査—PIL—岡堂哲雄 (編) 『心理検査学—臨床心理査定の基本—』垣内出版 pp.323-343.
- 下妻晃二郎 (2001). 疾患特異的尺度「がん」池上直己・福原俊一・下妻晃二郎・池田俊也 (編) 『臨床のためのQOL評価ハンドブック』医学書院 pp.52-61.
- 高橋正美・井出訓 (2004). スピリチュアリティの意味—若・中・高齢者の世代比較による霊性・精神性についての分析—老年社会科学, **26** (3), 296-307.
- 竹田恵子・太湯好子 (2006). 日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討川崎医療福祉学会誌, **16** (1), 53-66.
- 竹田恵子・太湯好子・桐野匡史・雲かおり・金貞淑・中嶋和夫 (2007). 高齢者のスピリチュアリティ健康尺度の開発—妥当性と信頼性の検証—日本保健科学学会誌, **10** (2), 63-72.
- 田崎美弥子・松田正巳・中根允文 (2001). スピリチュアリティに関する質的調査の試み—健康およびQOLの概念のからみの中で—日本医事新報, (4036), 24-32.
- 上田直宏 (2006). 学生のもつスピリチュアルベインの構成概念とその表出関西学院大学社会学部紀要, **101**, 143-158.
- 山本嘉一郎 (2002). 共分散構造分析とその適用山本嘉一郎・小野寺孝義 (編) 『Amosによる共分散構造分析と解析事例 [第2版]』ナカニシヤ出版 pp.1-22.
- 山崎章郎 (2005). 人間存在の構造からみたスピリチュアルベイン緩和ケア, **15** (5), 376-379.

抄録

本研究の目的は、日本人青年層のスピリチュアリティ傾向を測る尺度を作成することであった。スピリチュアリティの構成概念に基づいた質問紙調査が、271名の大学生を対象に実施された。統計的に不適切な項目を除いた後、最尤法—プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、最終的に5因子27項目が得られ、第1因子より順に『自然との調和』『生きがい』『目に見えない存在への畏怖』『先祖・ルーツとの繋がり』『自律』と命名された。この5因子構造27項目の質問項目を、日本人青年スピリチュアリティ評定尺度 (JYS) とした。因子抽出後の累積寄与率は、53.03%であった。尺度の信頼性については、クロンバック (Cronbach) の α 係数 ($\alpha = 0.89$) で確認した。また構成概念妥当性は Comparative Fit Index (CFI=0.91)、Goodness of Fit Index (GFI=0.86)、Adjusted Goodness-of-Fit Index (AGFI=0.83)、そして Root Mean Squares Error of Approximation (RMSEA=0.06) など で判断した。さらに基準関連妥当性に関しては STS との相関 ($r = 0.69, p < .01$)、PIL との相関 ($r = 0.55, p < 0.001$)、死生観尺度との関連性で確認した。以上の結果を総合的に判断して、JYS は日本人青年のスピリチュアリティ傾向を測定するのに有効な尺度であると判断した。

Abstract

The purpose of this study was to create a spirituality rating scale for the youth of Japan. A questionnaire was developed based on the "Concept of Spirituality" and was filled in by 271 university students. After excluding statistically inappropriate items, a factor analysis (Maximum Likelihood Estimation with Promax Rotation) was conducted. As a result, five factors for twenty-seven items were obtained. These five factors were termed as follows: Harmonizing with Nature, *Ikigai* (Japanese word for one's sense of purpose in life), A Feeling of Awe Regarding Invisible Existence, Connecting with One's Ancestors and finally Self-determination. The questionnaire consisting of five categories with their twenty-seven items was defined as the Japanese Youth Spirituality Rating Scale (JYS). The cumulative contribution percentage after extracting the factors was 53.03%. The reliability coefficient of the JYS obtained after applying the Cronbach'

s alpha was 0.89. The construct validity of the scale was confirmed by using the Comparative Fit Index (CFI=0.91), the Goodness of Fit Index (GFI=0.86), the Adjusted Goodness-of-Fit Index (AGFI=0.83) and Root Mean Squares Error of Approximation (RMSEA=0.061). The criterion-related validity of the scale was confirmed by the correlation coefficients with STS($r=0.69$ $p < .01$), and PIL($r=0.55$ $p <$

0.001). In addition, a relation of the JYS to the Scale of Life and Death View was also shown. Through these overall findings, it was found that the JYS could be a useful scale to measure the spiritual tendency of Japanese youth.

Key words : spirituality, rating scale, Japanese youth